

安全・管理をめぐる「窓と鏡」としての駐在所

－ 地域警察の機能と役割についてのインタビュー調査 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
山崎 瑞貴

駐在所には警察官とその家族が住み、24時間地域で起こる様々なことに1人で対処する必要があり、妻はそれを手伝う。本研究では、駐在所を「窓」として何が覗き見られるか、「鏡」として何が映し出されるか、その実相を駐在所に住む夫婦へのインタビューを通して浮かび上がらせたい。

交番制度は日本の治安が良い理由であるとされ、ブラジルやシンガポール等世界に輸出された。同様の機能を持つ駐在所は交番と比較してより地域に密着した活動を行っている。家族で地域に住み、公私の区別がないようにも思え、家父長制の残るジェンダー秩序を有したシステムだとも考えられる。女性の生き方やプライバシーの問題、ライフスタイルなど多くの現代人の考え方にそぐわない面が見られることや世界的に見ても特殊な勤務形態であることは確かである。しかし、実際には豊かに暮らす駐在所の家族の姿が見られた。日常に寄り添い、諭しながら事態の深刻化を防ぎ、「在る」ことを保険として地域の安全な暮らしを支えているとも取れる。地域で起こる出来事をあまねく把握し、程度に合わせて相応しく対処する「駐在さん」自身が工夫を重ねながら楽しみ、温かい家庭生活を営んでいる。それを可能とする治安の良さが駐在所に映し出された。そして、駐在所を通して見えてきたのは、明治期から存続されてきた背景にある、厳しい管理や監視による疫病や貧困家庭等への対策を行った過去や、その結果として一定の生活水準と高いモラルを国民全体が共有しており、それが治安に大きく影響しているということである。完全な安全が保証されないこの世界において、どのようにそれなりの安心を作り出していくのかという戦略が見えたと考えられる。